

サンプル版

マゾマン高坂猛シリーズ 02

マゾマン高坂猛の淫モラルアート

作者：金目

目次

登場人物

第 01 話 マゾマン高坂猛の破廉恥ヌードモデル

第 05 話 高坂猛のボディアート 01「大人の男ペイント」

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第 02 話 マゾマン高坂猛の山羊尻尾絶頂

第 03 話 マゾマン高坂猛のトラブル全裸帰路

幕間 パチンポの高坂猛

第 04 話 高坂猛のボディアート作例「マゾネズミ」

第 06 話 このスケベ顧問！ ド淫乱！ 遠野啓太郎編

第 07 話 高坂猛のボディアート 02「ケツを光らせてこそ蛭」

第 08 話 このスケベ顧問！ ド淫乱！ 平岡信二編

第 09 話 高坂猛のボディアート 03「牡牛に発情する男妃さま」

第 10 話 このスケベ顧問！ ド淫乱！ 山岸敦也編

第 11 話 高坂猛のボディアート番外「大人のアート縄化粧」

奥付

マゾマン高坂猛過去作一覧

主なプレイ内容

ヌードモデル、マゾ絶頂、アナルビーズ、野外露出、野外全裸オナニー、疑似出産プレイ、ボディアート、ペインティング、洗体責め、バイブ、フェラチオ、アナルセックス、縄化粧

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有、模倣・なりすましを目的とした機械学習など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーであり、現実社会の倫理観にそぐわない描写も含まれます。現実での行為への参考になさらないよう、お願いいたします。

登場人物

高坂 猛(こうさか たける)

27 歳。男性。佐渡間高校体育教師にして、剣道部顧問。
平常時 11.6cm、勃起時 23.7cm のペットボトルおちんちん。
猛にとって、己の男性器はおちんちんであり、早漏と評する資格すらないと称している。
チンポ狂いにして、痛みを伴わない辱めに悶えるマゾ。
人助けと思って代行したヌードモデルが切っ掛けで一連の淫モラルアートで辱められる。

柿沢(かきさわ)講師

男性。佐渡間高校と人材交流提携を結んでいる四句原高校の美術講師。
美術の授業のために手配していたヌードモデルが食中毒で来られなくなり困っていたところ、猛を見つけてヌードモデルを依頼した。

庄司(しょうじ)先生

男性。佐渡間高校と人材交流提携を結んでいる忠相高校の嘱託講師。本職は彫刻家。
好きが高じて彫刻家になるほどのギリシア彫刻愛好家であり、猛に協力を求めたヌードモデルデッサンに用いるため、山羊の蹄の靴を自作した。

本宮(もとみや)

男性。忠相高校の学生。
サテュロスが半人半山羊と知り、冗談半分で山羊尻尾のアナルプラグを作成した。

横尾(よこお)

男性。堀葦大学の写真サークルのリーダー。
手違いで小型バスが先に大学に戻ってしまったハプニングから、全裸の猛を大学まで歩かせることを思いつく。

山岸 敦也(やまぎし あつや)

男性。佐渡間高校剣道部部長。
口数は少なく、目つきが鋭く、身長が 189cm もあるため、威圧感を与えがちな男子学生。
外見に反し、試合外の性格は穏やかでややマイペース。
猛に向ける性欲が剣道部員たちの中でも強く、激しい。

平岡 信二(ひらおか しんじ)

男性。佐渡間高校剣道部副部長。

口が達者で、調子に乗ると余計なことを言ってしまうタイプ。気がつけばすぐに謝るため、周囲には困った癖だと思われている。

遠野 啓太郎(とおの けいたろう)

男性。佐渡間高校剣道部の新入部員。

お調子者でスケベなことにも興味津々の典型的な男子学生。

スケベなことを口にする割に、目の当たりにすると挙動不審になる。

鳴島 泰輔(なるしま たいすけ)

27 歳。男性。2 年前より佐渡間高校嘱託職員として剣道部コーチを務める。

本業は某スポーツ用品メーカーでのトレーニング機器検査技師。

猛とは丈翼大学剣道部の同期であり、SMを通じて猛に、チンポ狂いのケツマ○コとマゾ気質を受け入れられるよう教育したという過去がある。

原田 草摩(はらだ そうま)

27 歳。男性。退職代行会社所属の弁護士。

DK3 年の猛のケツマ○コ開眼に至るまでの過程に半分ぐらい関わっている。

猛がボディキャンバスを務める過程での淫乱行為を聞き、泰輔と共に猛に縄化粧を施して辱める。

第 01 話 マゾマン高坂猛の破廉恥ヌードモデル

猛が再就職をした佐渡間高校は、私立高校の中でも際立った特徴がある。

その一つが、大学並みの科目の豊富さと教員、講師陣の層の厚さだ。

教員・講師陣の層の厚さは、学外からも非常勤として人材を集めるある種の食欲さと、提携校との間で教員、講師の相互派遣を行っていることに起因している。

雑な言い方をするのならば、人材の融通をしやすい制度と勤務形態を採用することにより、急な欠員に対して他所からの補充をしやすくなっているわけだ。

「ありがとうございます、高坂先生。

急な申し出、そして、専門外のことでありながらご快諾を頂けたこと、感謝いたします」

佐渡間高校と提携をしている高校の一つである四句原高校の美術講師である柿沢講師から丁寧な挨拶を受け、猛は頭を下げた。

「いえ、俺でお役に立てることです。

何より、俺の専門分野とは違いますが、折角の機会が失われてしまうことは学生たちの成長にとってよくないことですから」

猛が柿沢講師に返答をすると、柿沢講師がほっとした顔をする。

「提携校との人材相互派遣制度のことを踏まえても、本当に助かりましたよ。

……まさか、契約をしていたモデル派遣会社で食中毒が起きていたなんて」

柿沢講師が困惑をした様子で首を振った。

本来、四句原高校の今日の美術の授業では、契約をしていたモデル派遣会社から派遣されるヌードモデルを用いる予定であった。

だが、昨日の午後になって四句原高校に連絡が入り、モデル派遣会社所属のモデルを含め、ほぼ半数の社員が食中毒で救急搬送されたと伝えられたのだ。

そして、救急搬送された社員の中にはモデルが全員含まれているため、件のモデル派遣会社からの派遣は不可能となり、しかも、昨日の今日では他のモデル派遣会社に代行を打診しても望みは薄いという状況であった。

何しろ、ヌードモデルという存在は、人体を芸術として扱う分野において基礎の一つとして一定の需要がある一方で、供給が少ないのだ。

ヌードモデルとしての需要、もしくは基準値を満たす肉体美の持ち主であり、かつ、全裸を晒すことに抵抗がなく、加えて、同じ姿勢を維持するだけの時間を受け入れられる者となると、数が限られる。

昨日の今日で代行を、というのは無理があることであり、ヌードモデルの需要過多を踏まえると、代行の手配がいつになるのかも予測できないのだ。

けれど、四句原高校、そして、柿沢講師にとって幸運だったことは、昨日、佐渡間高校の柳川校長と猛、他数名の教員と講師が交流会の打ち合わせのために四句原高校を訪れていたことであった。

柿沢講師に見初められた猛は、事情を聴かされた。

そして、ヌードモデルではあるが、男性器まで丸出しにするのではなく、腰布を巻くというので、猛はヌードモデルを了承したのだ。

「高坂先生には、俵を担いだ姿勢をとってもらいます。

といっても、昨日説明をしたとおり、中身は米ではなく、重量としては10キログラムに調整してあります。

これを15分担ぎ、10分のインターバルを入れ、更に15分、正味30分です」

「俺は、美術の授業は必須履修分しか受けなかったのですが、正味30分で大丈夫でしょうか？」

「限られた時間で、人物の魅力を描くことも、技術の訓練ですから」

猛の心配に対し、説明を行った柿沢講師が猛をじっと見つめた。

「とはいえ、高坂先生の魅力を描くには、30分は不足だと感じる学生も多いでしょうね。

私は、静物画を専門としているのですが、高坂先生ならば、うん、人物画に足を踏み入れるだけの魅力がある」

「いや、お気持ちはありがたいのですが、モデルの経験に乏しい俺に務まるかは分かりません」

「そうですね、まくし立ててしまい、ですいませんでした」

柿沢講師は口ではこのように告げているものの、勿体ない、と思っていることは猛に向けて視線を見れば明らかであった。

実のところ、柿沢講師による猛への評価は大袈裟なものではない。

猛は、男らしい顔立ちでありながらも性的欲求の類を感じさせない爽やかなイケメンである。

そして、今日はヌードモデルを務めるため、着替えやすいようにTシャツとハーフパンツを着用しているが、腕や脚は色白の肌でありながらも剣道で鍛え上げられているため、西洋彫刻のような魅力を放っている。

露出している腕や脚は、ぱっと見る限り、無毛のように見える。

近くで観察をすると、細い産毛が生えているため、処理をしているわけではないが、体毛の薄さもまた、西洋彫刻のような魅力の一端となっている。

Tシャツに覆われた上半身は、胸板がTシャツを押し上げる一方、腹回りの布地は余り気味であり、腹回りが引き締まり、贅肉で弛んでいないことを示している。

ハーフパンツの腰回りはがっしりとしており、ハーフパンツの布地の緩やかな盛り上がりは雄肉がみっしりと詰まったケツ肉の分厚さを示している。

そして、ハーフパンツの腰の高さは、猛の足の長さ、スタイルの良さを示している。

要するに、猛を構成する要素にはイケメンであると思わせる魅力的な外見なのだ。

そして、猛のイケメンぶりは表情にも現れている。

黙っていれば顔が良い男はそれなりにいるが、そうした黙っていれば系というものは表情に卑しさや情けなさが現れがちである。

けれど、猛はごく普通に会話をする様子や、照れる様子、謙遜をする様子など、表情の変化に際し、卑しさや情けなさが現れることは、基本的には、ない。

基本的な、と但し書きをしなければならないのは、猛も人間であり、淫欲があり、その淫欲を発散させてもらえるときは、いやらしく浅ましい姿を晒すからである。

けれど、猛は基本的に礼儀正しく忍耐強い性格をしている。

忍耐強さは受動的な面も含んでおり、一概に長所とすることはできないのだが、猛の淫欲が絡まない限りは、元剣道選手にして、剣道家としての自負と倫理観に則った行動をとることができる。

このような魅力的な男を前にして、柿沢講師が人物画に足を踏み入りたいと告げるのも当然と言えるだろう。

「では、更衣室まで案内します」

「よろしくお願いします」

柿沢講師の案内に従い、猛は更衣室へと向かった。

「ではロッカーの中に腰布が入っていますから」

柿沢講師に鍵を渡された猛は、そのまま更衣室に入り、中から鍵を掛ける。

そして、ロッカーの鍵を開け、腰布を確認する。

猛は腰布について、公衆浴場において腰に巻くタオルぐらいの大きさの布を想定していた。

だが、ロッカーの中に入っていた腰布は猛の想定よりも小さなものであった。

猛が手に取り、広げてみると横幅の長い三角形の形状をしており、この布で腰回りをすべて隠すのは無理だろう。

きちんと確認をしないで公衆浴場における腰巻タオルのようなものだろうと思い込んでいた猛の落ち度だ。

猛はそう結論づけると、服を脱ぎ始めた。

Tシャツを脱いだことにより、猛の逞しい上半身が露わになる。

剣道の鍛錬に一意専心していたことを証明する逞しい上半身には、体毛が見られない。

無毛なのではなく、腕や脚と同じように薄い産毛しか生えていないので、無毛のように見えるだけだ。

猛は腋毛も生えないため、色白の肌とがっしりとした筋肉により、西洋彫刻のような魅力を放っている。

猛はそのまま、ハーフパンツといつも穿いている赤いボクサーパンツをまとめて脱ぐ。

佐渡間高校剣道部の部員たちに定期的に剃ってもらっている無毛の下腹部が露わになり、そのまま猛の下腹部にぶら下がるナニが飛び出した。

ぼろりん！

男性器にして排泄器であることを差し引いても、猛にとっては最低最悪の恥部であるペットボトルおちんちんが露わになった。

猛のペットボトルおちんちんは、見かけ上は立派なデカチンである。

陰茎は太く長く逞しく、雁首は高く、雁首には自然に剥けた包皮が留まっている。

ずる剥けの亀頭は童貞のピンク色をしている。

玉袋は大きな陰茎と釣り合う大きさをしている。

金玉はSサイズの鶏卵程度の大きさをしており、精力が強そうだと評されることが多く、実際に射精量も多い。

見かけ上は、男の大半が羨むに違いないデカチンである。

しかも、猛のペットボトルおちんちんは男性器にして排泄器であるにも関わらず、汚らしさやいやらしさを感じさせない。

男性器であるにも関わらず、清潔感すらあるイケメンチンポなのだ。

とはいえ、猛にとって、このペットボトルおちんちんは最低最悪の恥部である。

まず、このペットボトルおちんちんは、チンポセックスの土俵にも立てない不能にして無能である。

猛は過去に一度、男のケツ穴にチンポを突っ込む機会を得た。

けれど、猛は己のチンポで相手の男をイカせることができず、己ばかりが絶頂してばかり

という情けない状態であった。

結局、猛のケツにおチンポさまを突っ込んでもらっての三連ケツによって、相手の男をイカせることができたのだ。

こんな情けない愚物を、猛が尊び、欲情するおチンポさまと同列に並べることなど、猛にはできない。

そして、猛にとって、見かけ倒しということは、非常に恥ずかしいことである。

見掛け倒しという点において、見かけ上は立派なデカチンであり、その実態はチンポセックスの土俵にも立てない不能にして無能であるペットボトルおちんちんは、とても恥ずかしいモノだ。

猛は、命令されない限りは恥ずかしい行為などできない。

そして、今の猛は全裸になれ、と命令をされたわけではなく、美術教育のためのモデルを果たすためにここにいる。

だから、猛はペットボトルおちんちんを見られないように覆い隠したい。

猛は腰布を腰に回す。

腰布はギリギリで猛の腰を回り、端を結ぶことができた。

けれど、腰布の上下幅が足りないため、三角形の腰布の頂点の先に猛の亀頭が見えてしまっている。

「これじゃ不味いな」

猛はぼやいた。

一般論として男性器を隠しきれていない状態で学生たちの前に姿を見せることがよくないことだ。

そして、猛にとってペットボトルおちんちんは最低最悪の恥部であるため、露出は避けたい。

猛は腰布を一度解き、腰骨よりやや下で結ぼうとする。

けれど、猛のがっしりとした腰回り、そして、雄肉がみっしりと詰まった分厚いケツ肉が幅を取っているため、今度は腰布を結べない。

猛は、腰布を片手に持ち、それを垂らすことでペットボトルおちんちんを隠せないか、と考える。

いや、駄目だ。

猛は己の考えを即座に否定した。

猛は、俵を担いだ姿勢を取るのだ。

米俵の本来の重量である 60kg ではなく、中身を調整し、10kg にしてあるとはいえ、物を抱えた姿勢を保持する際に反対側の腕でバランスを取らなければならない。

とてもではないが、ペットボトルおちんちんを隠すために用いる余裕がない。

だが、腰骨の高さで巻くと、亀頭が丸見えになってしまうし、腰骨より下で巻くには腰布の長さが足りない。

猛は腰布を持ったまま、全裸で悩む。

男らしい顔立ちのイケメンであるため、全裸で悩んでいようとも、猛の様子は絵になる。

その悩みがペットボトルおちんちんを隠すためだとしても、猛の魅力は損なわれることはない。

滑稽な悩みを抱いたまま、猛は腰布を手を持ち、全裸で悩んでいる。
この場は無責任な男がいたのならば、猛にこう告げるだろう。

「お前はチンポまでイケメンなんだから、そのままイケメンチンポ丸出しでいいじゃん！」

だが、猛は命令されない限り、ペットボトルおちんちんを露出したくない。

猛にとって、ペットボトルおちんちんとは最低最悪の恥部なのだ。

悩み続けた猛は、よいアイデアを思いついた。

猛は腰布を腰回りではなく、ペットボトルおちんちんの根本に巻きつけた。

腰回りからペットボトルおちんちんを隠すのではなく、ペットボトルおちんちんだけを隠すことにしたのだ。

ペットボトルおちんちんに腰布を巻いただけの己の姿を、変態的だ、と猛は恥ずかしく思う。

何も事情を知らない者が見れば、猥褻物陳列罪にならない露出の限界に挑んだかのような卑猥さがあるため、猛が変態的だと感じることも、ごく普通のことだ。

「高坂先生、そろそろよろしいでしょうか？」

柿沢講師に更衣室の外から呼びかけられ、猛は「今出ます」と返答する。

そして、ロッカーの鍵をかけてから更衣室の外に出た。

「あの、高坂先生……その姿は……」

「腰布が足りなかったもので……ですが、見えてしまうよりはマシかと」

柿沢講師の戸惑いに対し、猛は弁明をした。

「まあ、そうですね。」

見えてしまうよりは、ええ」

柿沢講師が頷く。

「では美術室に向かいましょう」

「はい」

猛は柿沢講師に続いて、更衣室の隣にある美術室に向かった。

「え？」

美術室に入った猛は驚いた。

美術の授業でのヌードモデルということで、猛はイーゼルに囲まれた中央でポーズを取
るのだと想像していた。

だが、机を端に寄せた美術室の中央の台座を囲むように置かれたイーゼルは 4 脚、そし
て、学生数は 7 名であり、3 名の学生はスマートフォンによる画像・動画撮影が手軽な現
代において珍しいカメラを装備していた。

「あの、柿沢講師、ヌードモデルというのは写真撮影もするのでしょうか？」

猛は、カメラ撮影もされるとは想像していなかったので柿沢講師に尋ねた。

「ええ、カメラ撮影もします。」

あれ？ もしかして高坂先生が学生だった頃、撮影の授業はなかったのですか？」

「ありませんでしたよ」

柿沢講師は驚いた様子を見せているが、美術の授業で撮影を行うというのは猛には初耳であった。

「あれ？ 柿沢先生、その方はどこのどなたですか？」

「モデルの方とは、違いますよね。」

「何かあったんですか？」

「こちらのモデルの方も素敵ですけど、何があったんですか？」

美術部にいた学生たちは猛を見て、ペットボトルおちんちんに布を巻いた姿ではなく、当初予定をしていたモデルと違うことを尋ねてくる。

「ああ、通知が遅れてすまない」

柿沢講師が問いを重ねる学生たちの方を向いた。

「昨日の午後、予定していたモデル派遣会社から連絡があり、社員の半数が食中毒で救急搬送されたということだ。」

モデルの方々も救急搬送をされたため、今回は、こちらの方に来ていただいた。

四句原高校と人材交流提携をしている佐渡間高校の体育教員である高坂猛先生だ」

「高坂猛です、よろしくお願いします」

猛は学生たちに挨拶をした。

「よろしくお願いします」

学生たちは礼儀正しく挨拶をしている。

元々ヌードモデルが来ると認識をしていたからだろうか、ペットボトルおちんちんに布を巻いただけの変態的な猛の姿について、学生たちは何も言わない。

猛は、ペットボトルおちんちんに布を巻いただけの姿を気にしている己を、自意識過剰ではないか、と感じ始めた。

授業開始のチャイムが美術室内のスピーカーから流れてきた。

「では、高坂先生、台座の上をお願いします」

「はい」

猛は、柿沢講師の指示に従い、美術室の中央に置かれた台座の上に立つ。

「こちらを、肩の上で抱えてください」

「分かりました」

猛は柿沢講師が抱える模造の俵を受け取る。

そして、姿勢を崩さずに済むように足を肩幅に開く。

それから、猛は受け取った模造の俵を右肩まで持ち上げる。

猛の背中中の筋肉がぎゅっと引き締まる。

それと同時に、雄肉がみっしりと詰まった猛のケツもぎゅっと締まり、ケツエクボが深くなった。

10kg の重さに調整されている模造の俵を右肩に乗せた猛は、バランスを取るために左手を腰に当てた。

「視線はやや上にしてください。」

高坂先生はモデルとしては素人なので、視線を学生に合わせると緊張してしまうでしょう」

「はい」

猛は柿沢講師の指示に従い、視線をやや上にする。

確かに、学生たちの顔から視線がずれているため、学生たちの顔色などを気にせずに済む。

「では、前半15分、始めなさい」

「「「はい」」」

柿沢講師の合図とともに、美術室に集まった学生たちがデッサンや撮影を始めた。

模造の俵を右肩に担いだ猛の姿は、ただの全裸とは違った魅力がある。

まず、10kgの重荷を右肩に担いでいるため、筋肉が重みに耐えるために張っている。

平時でも厚みを感じさせる胸板は厚みを増し、右腕の筋肉は収縮することにより筋肉の付き方が分かりやすくなっている。

猛は腋毛も薄い産毛しか生えていないため、模造の俵を担いでいる右脇は筋肉の付き方が分かりやすくなっている。

背中筋の筋肉にも力が籠められ、背中周りの筋肉の複雑な巡りを示している。

右肩に担いだ重荷を揺らさないように、腹式呼吸をしているため、上半身が呼吸によって揺れることはなく、猛の体幹の安定感と力強さを示している。

腹筋は、腹式呼吸によって収縮を繰り返している。

腹筋からへそ、そして下腹部までのラインも力強さと滑らかさが両立している。

チン毛を剃られた下腹部は、筋肉のラインがうっすらと見えており、V字のラインによって視線を股にぶら下がるモノに誘導する。

猛がペットボトルおちんちんを恥じて腰布を巻いて隠したため、その全容は学生や柿沢講師には見えていないが、巻いた布のシルエットから、覆い隠されたモノが常人より大きいことを暗示している。

猛のケツは10kgの重荷を支えるためにぎゅっと引き締まっており、雄々しいケツエクボもくっきりとしている。

ときどき弛緩する瞬間に猛のケツ肉が僅かに揺れることで、猛が動く西洋彫刻ではなく、西洋彫刻のような魅力を放つ人間であることを示している。

台座を踏みしめる脚部にも筋肉がしっかりとついている。

そして、薄い産毛しか生えていない猛の脚部もまた、西洋彫刻のように力強さと滑らかさを併せ持っている。

猛は、己をモデルに不慣れだと語った。

経験不足についてはその通りだ。

だが、猛には芸術家の心を引きつける力が備わっている。

高坂猛の魅力を、己の手で形として残したい！

芸術を志すものにそのような欲求を抱かせるだけの引力が猛の身体には備わっているのだ。

その魅力は学生たちや柿沢講師の様子を見ればよく分かる。

学生たちは一言も無駄口を叩かず、正味 30 分の猛のモデル時間を無駄にしないように、猛の観察をしている。

柿沢講師も、ストップウォッチを握ってはいるものの、視線は完全に猛の身体に向けられている。

猛は、シャッター音と鉛筆を滑らせる音、そして学生たちと猛自身の呼吸音だけで満たされた美術室の真剣な雰囲気気が引き締まる。

時計の針の音すらしない静寂において、学生たちが真剣に授業に取り組んでいるのだから、猛は教師として、いや、モデルとして彼らの妨げにならないように振る舞わなければならない。

猛は、学生たちの真剣さに応じようと、気を張る。

けれど、10 分もすると下腹部の違和感が気になってきた。

腹式呼吸によって腹筋が動くことで、腹筋と繋がる筋肉も動く。

腹筋と繋がる下腹部の筋肉も呼吸に合わせて動くことで、腰布を巻いた猛のペットボトルおちんちんも動く。

ペットボトルおちんちんを見られたくない一心で巻いた腰布の巻き方がきつかったのか、呼吸のたびに腰布とペットボトルおちんちん周りの皮膚が擦れるのが気になってきたのだ。

普段ならば、気にするほどではない些細な違和感かもしれない。

だが、モデルとしてじっとすることに専念をしているためか、気を紛らわせることもなく、一度自覚をした違和感を忘れることは、猛には難しかった。

時計は、猛の正面にはない。

かといって、時計を見るために首を回すのはモデルとして良くないことだ。

姿勢を変えれば、集中している学生たちの妨げとなってしまう。

けれど、猛はペットボトルおちんちんに巻いた腰布を少し緩めたい。

いや、休憩時間まで我慢しなければならない。

猛は、そう考え、下腹部の違和感に耐える。

呼吸を腹式から胸式に変えようかとも思ったが、胸式呼吸に変えれば呼吸に伴って肩や腕が僅かに動く。

右肩に模造の俵を担いでいるのだから、胸式呼吸に変えれば、右腕や模造の俵の動きが学生たちの妨げになるかもしれない。

耐えるしかない。

そう決めることは、猛にとって苦ではない。

猛は、忍耐強く受動的な性格である。

そして、痛みを伴わない辱めに従わされたいマゾでもある。

そうした猛の気質にとって、己の不快感を誰かのために我慢をする、ということは気持ちよいことなのだ。

かつては、この気質のために何年もマゾヒズムの充足とチンポへの淫欲を阻害されてしまったという失敗もしているが、今回は耐える期限が定まっている。

猛は、ペットボトルおちんちんに巻いた腰布と下腹部の皮膚が擦れる違和感に耐えながら、モデルとして姿勢を保ち続けた。

ピピピピ！　ピピピピ！

ストップウォッチの音が美術室に響いた。

「……よし！　休憩！

高坂先生、休憩時間です」

柿沢講師の号令に合わせ、美術室に張り詰めていた空気が緩んだ。

「15 分ってこんなに早かったっけ？」

「お前、どんだけ普段だらけているんだよ」

「でも、今日は凄く集中できた気がしないか？」

学生たちが、高校生らしい快活な会話を始める。

猛は右肩に抱えた模造の俵を胸元に抱え直す。

それから、腰を真っすぐに保持したまま、膝を曲げて中腰になる。

ふくらはぎ、太もも、そして雄肉がみっしりと詰まったケツ肉がギンギンに張り詰める。

中腰になった猛は、模造の俵をゆっくりと台座の上に下ろした。

「お疲れ様です、高坂先生。

緊張でお疲れではないですか？」

柿沢講師に労われた猛は、素直に頷く。

「ええ、観察対象として見つめられることは思ったより緊張しました」

猛が感じたことを伝え、柿沢講師が「おや」と意外そうな顔をする。

「高坂先生は、中々の造形美をお持ちだ。

ならば、見つめられることには慣れているものとばかり」

柿沢講師の言葉に、猛は確かに、と思った。

自惚れではなく、事実として猛の容姿は他人の目を惹くだけの力がある。

まず、男らしい顔立ちのイケメンでありながらも、性的欲求の類を感じさせない爽やかさが希少だ。

そして、この国ではあまり見られない色白の肌も目立ちやすい。

加えて、色白の肌が虚弱さではなく、剣道で鍛え上げられた筋肉との相乗効果によって西洋彫刻のような魅力に達していることも貴重だ。

だから、高坂猛という男が周囲の目を惹くイケメンであることは事実なのだ。

「言われてみると不思議ですね」

猛は、モデルとして見つめられることと、普段通りの周囲からの注目と、何が違うのかを考えてみた。

周囲の人間たちは、猛の容姿に目を奪われることが多い。

けれど、モデルとして台座の上でポーズを取っているときに比べると、鋭さは感じない。

猛は、なぜ、モデルをしているときに向けられた視線に鋭さを感じたのか、余計に緊張をしたのかを、考える。

ペットボトルおちんちんに巻いた腰布の微調整のことも忘れて、何が違うのかを考える。感覚的には明白な違いがある。

だが、その感覚を言葉として表現できない。

沈黙考する猛の真剣な表情にも、人目を惹く引力がある。

雑談をしていた柿沢講師も、猛の表情に惹かれ、じっと観察をしている。

「柿沢講師、そろそろ時間です」

「あ、すまない」

学生の一人の呼びかけに、柿沢講師が頭を振った。

「すいません、高坂先生。」

休憩時間なのに雑談で潰してしまって。

「トイレなどは平気でしょうか？」

「あ、いえ、大丈夫です」

柿沢講師に問われ、猛は我に返った。

そして、尿意などに問題はないことを柿沢講師に伝えた。

「では、あと1分ですので、台座をお願いします」

「あ、はい、分かりました」

猛は台座に上がり、模造の俵を掴もうとしたところで、ペットボトルおちんちに巻いた腰布を調整したかったことを思い出す。

とはいえ、あと1分だというのに更衣室まで戻ることはできない。

猛はしゃがみこんだまま、腰布を解く。

正面からペットボトルおちんちんが見られないように、解いた腰布をペットボトルおちんちんの前にかざす。

確かに、ペットボトルおちんちんの前に腰布をかざせば、正面からは隠せるだろう。

けれど、腰布を解いたことで、猛の大きな玉袋は露わになっている。

そして、屈んだケツと太ももの間に大きな玉袋がデデンとぶら下がっている様子は、背後からは丸見えであった。

猛はそのまま腰布を緩めに巻きなおす。

そして、台座の上に置かれた模造の俵を持ち、胸元に抱える。

そのまま、膝を伸ばし、立ち上がった猛は模造の俵を右肩に抱え上げた。

「よし、皆、準備はいいね。」

後半15分、はじめ！」

柿沢講師の合図とともに、猛のペットボトルおちんちに巻かれた腰布がはらりと緩んだ。

「あ」

腰布が緩んだ感覚に、猛は声を漏らしてしまう。

「静かに！」

漏らした声に対し、柿沢講師がピシリと鋭い注意を放つ。

猛は、学生たちや柿沢講師の真剣さを思い出し、余計な声を出してしまった己を恥じる。

だから、緩んだ腰布がそのままほどけ、台座の上に落ちるのを感じながらも、猛は必死に声を出さないようにした。

猛のペットボトルおちんちは男性器にして排泄器でありながら清潔感のあるイケメン

ぶりである。

太く長く逞しい陰茎は平常時で 11.6cm もある。

雁首は高く、その根元には包皮が常にとどまっているずる剥けだ。

亀頭は童貞のピンク色をしており、平常時から大きめだ。

雁首の高さから、猛の陰茎は「性の矢印」と評されたこともあるのだ。

そして、腰布の巻きなおしの際に、ケツ側からは見えていたが、猛の玉袋も大きな陰茎と釣り合う大きさをしている。

鶏卵Sサイズ程度の大きさの金玉を収めた玉袋はどっしりと鎮座している。

こんなにも大きな男性器だというのに、不潔さやいやらしさを感じさせない。

チンポとのセックスを求める女の子たちにとって、理想的な男性器だと言えるだろう。

けれど、このペットボトルおちんちんはチンポセックスの土俵に立てない不能にして無能である。

チンポとして求められ、ケツ穴に誘い込まれても、一人で何度も絶頂するだけであり、一人で相手をイカせることもできない不能にして無能なのだ。

猛は、見掛け倒しであることをみつともないと感じる。

そして、男性器にして排泄器であることに加え、見掛け倒しのパチモンでしかないペットボトルおちんちんを強く恥じている。

見られている！　こんなものを見られている！

猛は恥ずかしさに顔を赤く染め始めた。

動いてはいけない。

猛は、教員としての責任感、そして、引き受けた約束を守り抜こうとする誠実さで、己の身体を律する。

けれど、猛にとって、ペットボトルおちんちんを見られることは、とても恥ずかしいことである。

どうしても、意識をしてしまう。

己を律しようとする意志の強さと、羞恥に悶える心の弱さが猛の中でせめぎ合う。

その緊張感が、猛の健康的な肉体美からいやらしさを匂わせ始めた。

高坂猛を知る者の半分ぐらいは、高坂猛を欠点がないことが欠点と評するだろう。

男らしい顔立ちのイケメンでありながら、性的欲求の類を感じさせない爽やかさ。

色白の肌と剣道で鍛え上げられた筋肉の調和による西洋彫刻のような魅力。

見惚れるほどの外見と、剣道選手時代に築き上げた実績を根拠に驕ることのない誠実さ。

高坂猛の特徴を列挙すると、欠点らしい欠点がないと文句をつけるしかないのだ。

だが、高坂猛を深く知る者は、猛自身も恥じている欠点をよく知っている。

それは、ペットボトルおちんちんだ。

外見は立派なずる剥けデカチンであり、しかも、男性器にして排泄器であるというのに、不潔さや卑猥さを感じさせないイケメンデカチンである。

だが、猛のペットボトルおちんちは、チンポとしての評価を与えるならば、論外、と言うほかない。

猛はかつて、ある男に、互いにケツを犯し合おうという提案の元、ケツ穴を差し出されたことがある。

けれど、猛は差し出されたケツ穴で短時間に何度もイきまくり、差し出されたケツ穴を一度もイかせられなかったのだ。

猛は、見掛け倒しであることを恥ずかしいことだと思っている。

だからこそ、見かけは立派なデカチンであるのに、その実態はチンポセックスの役に立たない不能にして無能である己のペットボトルおちんちんを、最低最悪の恥と感じている。

そのコンプレックスの塊が今、美術を学ぶ学生たちに晒されている。

猛は、恥ずかしさに全身を真っ赤にしている。

猛は、西洋彫刻のような色白の肌をしているため、羞恥による変化が分かりやすい。

写真を学ぶ学生によるシャッター音が響くたび、猛は、こんな恥ずかしいものを撮影されていると強く恥じ、居た堪れなくなってしまう。

マゾでもある猛は、恥ずかしい命令に屈服させられることを望んでいる。

ペットボトルおちんちんを晒せ、と命令されていたのならば、猛は命令によってマゾスイッチが入り、露出させられている快感に浸れただろう。

けれど、今回のおちんちん丸出しは、ハプニングだ。

晒すべきではないものを、晒してしまったという罪悪感と、コンプレックスの塊を晒しているというストレスの方が大きい。

猛は、叶うならば丸出しのペットボトルおちんちんを隠したい。

けれど、美術講師である柿沢に、「動くな」と命じられてしまった。

猛は、恥ずかしいと思いながらも、ヌードモデルとして耐えるしかないのだ。

けれど、デッサンのために滑らせる鉛筆の音や、繰り返されるシャッター音が、否応なしに猛に、ペットボトルおちんちんが丸出しだ、と突きつけてくる。

恥ずかしいし、見られたくないのに、見られ、観察されてしまっている。

猛は、逃げ出したいと思った。

命令されていない猛は、常識と倫理観、羞恥心に逆らえない。

そして、猛の常識と倫理観はチンポの丸出しを悪しき事と定めており、羞恥心はペットボトルおちんちんを恥じている。

だが、猛は耐えないといけない。

ヌードモデルとして役目を果たさなければ、佐渡間高校教員としての信頼を損ねてしまう。

だが……恥ずかしい！

猛は、どうしてもペットボトルおちんちんが丸出しであることを強く意識してしまう。

そして、意識しすぎると誤作動を起こしてしまうのが、男性器である。

猛は、ペットボトルおちんちんが勃起し始めたのを感じた。

猛のペットボトルおちんちんは大きい分、海綿体の体積も多いため、血流の流れ込みを体感しやすいのだ。

駄目だ、と猛は焦る。

けれど、焦れば焦るほど、猛のペットボトルおちんちんは勃起していく。

そして、勃起してしまうと、猛は羞恥による快感から目を逸らせなくなる。

ああ、駄目だ。

美術の授業でのヌードモデルでしかないのに、勃起してしまうなんて、駄目だ。

こんな卑しいペットボトルおちんちんを見られて興奮するなんて、駄目だ。

駄目なのに……恥ずかしくて気持ちがいい！

自重しようとしていた猛であっても、マゾの本性を完全に抑え込むことは難しい。

コンプレックスの塊を見られ、観察されているという状況に、罪悪感を抱きながらも猛は興奮してしまう。

そして、猛の興奮を示すかのように、フル勃起ペットボトルおちんちんが大きく揺れた。

フル勃起した猛のペットボトルおちんちんは天を仰ぐかのような勃起角度を誇っている。

パンパンに膨れた亀頭は、性の矢印と揶揄されるほどに雁首が目立っている。

「うう……」

声を上げて、美術の授業に参加している学生たちの集中を妨げてはならない、と分かっているけど、猛はいやらしく呻いてしまう。

尿道をぬとぬと我慢汁がせり上がってくるのを感じたのだ。

猛の予感通り、我慢汁が猛の鈴口から溢れ出す。

ぬぷぬぷとぷとぷ、と湧き水のように絶え間なく我慢汁が溢れ、猛のペットボトルおちんちんに淫猥な艶を添えていく。

カメラを持った学生のシャッター音がさらに響く。

猛は、我慢汁を漏らしているところまで撮影されているのかと思うと、恐ろしさと強烈な羞恥心にマゾらしく悶えそうになる。

「っ！」

猛は強く歯を食いしばって喘ぎ声を押さえ込んだ。

だが、快楽の発散手段を封じたせいか、猛は余計に羞恥によって前立腺が悶えていることに気がついてしまう。

このままだと射精してしまうかもしれない。

その不安が頭をよぎったとき、猛は猛烈な羞恥心に震えた。

授業で射精をしてしまうなんて、あまりにも卑しすぎる！

そんなことは、絶対にしてはならない！

だが、意識してしまうと、その恥ずかしい未来にさえ悶えてしまうのが、猛の卑しいマゾヒズムだ。

強烈な克己心と、常識と倫理観の支配によって、普段は押さえ込めているが、猛は淫欲の完全なコントロールができるほどの超越者ではない。

射精してしまう予感、射精してしまう恐れによって、猛の羞恥心が煽られ、猛のマゾヒズムが悶え、前立腺が反応する。

悪循環によって、とうとう、猛は射精してしまうと確信した。

学生たちの前で射精はどうしても耐えられない猛は、「あの」と声を上げた。

「静粛に！」

だが、柿沢講師に再度、命じられた猛は動けなくなってしまった。

そして、猛の卑しいマゾヒズムは、柿沢講師の命令を「この場で射精しろ」と受け止めてしまう。

猛の一部は、駄目だ、と叫んだ。

だが、命令をされたと感じてしまったマゾヒズムを押さえ込み、射精衝動を押さえ込むには猛の意志はあまりにも弱すぎる。

猛は模造の俵を抱えたまま、歯を強く食いしばった。

静粛に、と命じられたのだから、喘ぎ声を漏らすわけにもいかない。

どっぴゅるるるるる！ どびゅ！ どっぴゅるるるる！

どっぴゅうううううう！ どびゅどびゅうう！

猛はこらえきれずに腰を揺らしてしまった。

その動きに合わせてザーメンが上方に打ち出される。

猛の勃起角度が天を仰ぐほどであったため、ほぼ真上に打ち出されたザーメンは、猛の頭や肩、台座を汚すばかりで、撮影をしていた学生やデッサンをしていた学生たちに被害を及ぼすことはなかった。

けれど、直接の被害がなかったとはいえ、猛のザーメンはとても臭い。

悪臭ではないのだが、ザーメンの臭いがかなり濃いのだ。

けれど、撮影をしている学生も、デッサンをしている学生も、集中した様子で作業を続けている。

彼らの真剣さを目の当たりにした猛は、こんなことで射精してしまう己の淫らさを強く恥じた。

猛は、尿道に残ったザーメンを絞ることもできずに、羞恥に震えながら終了時刻を待つ。

シャッター音や、デッサンで鉛筆を滑らせる音の一つ一つが、猛には弾効の声に聞こえる。

しばらくして、柿沢講師が声を上げた。

「終了」

猛にとって、待ち望んだ宣告であった。

「ああ、高坂先生、溜まってたんですね。

ああ、お気になさらずに。

プロでも勃起してしまうことがありますから、まあ、事故ですよ」

柿沢講師は何事もなかったように猛に話しかけてくる。

猛は、ますます己のいやらしさを突きつけられ、恥ずかしく思ってしまう。

「ああそうだ、折角だから記念撮影をしましょう。

そうだね、南くんと園田くんに撮影をお願いしましょう」

「あ、じゃあ始末をします」

記念撮影と聞かされた猛は、己の絶頂を始末しなければ、と思う。

だが……

「いえ、高坂先生はそのままです。

性行為は卑猥なものであると同時に、人間とは不可分のもの。

高坂先生のその姿もまた、人間という生き物を示す形象ですから」

「え、ですが……」

猛は、柿沢講師の理屈に対し、ザーメン塗れのままでは駄目だろう、と言おうとする。

「大丈夫。この写真は表には出しません。

性の悦び、性の尊さを語るべき場は、きちんと弁えていますから」

柿沢講師は熱心に言葉を並べる一方で、猛の手をぐっと握って離さない。

これはもう、諦めて撮影されるしかなさそう。

「……分かりました」

受動的で忍耐強く、逆を言えば我を押し通すことが苦手な猛は、射精してしまった己が悪いという気持ちから、柿沢講師の提案を受け入れることにした。

カメラを向けられた猛は、顔を真っ赤にしている。

当たり前だ。

全裸を撮影されるだけでも恥ずかしいのに、今の猛の裸体にはマゾ射精の証拠がへばりついている。

色白の肌と鍛え上げられた筋肉により、西洋彫刻のような健全美を備えている裸体は、羞恥にほんのりと染まっている。

恥辱と性感の血流によって火照った肌は、付着した猛のザーメンの濃厚な白濁を際立たせている。

普段、性的要素を感じさせない清潔感溢れるイケメンフェイスは、マゾ射精の快感の余韻と、マゾ射精を恥じ入る自省によって人間の不完全さと生々しさを匂わせている。

勃起してもなお、清潔感溢れるイケメンチンポは、マゾ射精の後始末をしていないため、ザーメンに塗れ、猛にも性欲と淫欲が備わっていることを証明している。

西洋彫刻のような健全美を放っていた猛が、性の悦びの痕跡を恥じている様子は、健全美と淫猥美という対立する概念の緊張という希少な美を放っている。

猛が恥辱に震えるほど、普段の猛が清潔感溢れるイケメンであることを思い出させる。

学生たちは、清潔感溢れるイケメンである猛が、マゾ射精をする淫乱であることを忘れぬよう、その浅ましい姿への撮影に持てる技術の全てを注ぎ込んでいた。

猛にとっては己の不明と淫乱さを恥じるしかなかったヌードモデルから、数日後のこと。
火曜日の剣道部自主練の監督に向かう猛の元に、柿沢講師が荷物を持ってやってきた。

「こんにちは、高坂先生。」

うんうん、やはり、高坂先生には人を惹きつける力がある。

うん、高坂先生がモデルをしてくれるのならば、人物画に挑むのもいい」

「勘弁してください」

柿沢講師の口説きを猛は断った。

ヌードモデルであんな醜態をさらしたあとでは、モデルになるなんて猛にはとてもではないが、承諾できないことだ。

「高坂顧問、こちらの方は？」

そこに通りかかった剣道部部長であり、剣道部員たちの中で一番性的衝動が強い山岸に問われた猛は、柿沢講師について紹介をする。

「こちらは、四句原高校の美術講師である柿沢さんだ。」

前に縁があって、世間話をしていたんだ」

ヌードモデルの顛末について語ることを恥ずかしく思った猛は、曖昧な言い方で誤魔化した。

「そういうわけです。」

今日は佐渡間高校で行われる会議のついでに、高坂先生にお渡ししたいものがありまして」

そう告げると、柿沢講師が持っていたファイルケースを差し出した。

「高坂顧問、そちらの方はどなたでしょうか？」

そこに、剣道部の自主練に集まってきた剣道部員たちが次々に寄ってくる。

猛は、嫌な予感を覚えた。

「四句原高校の美術講師の柿沢さんだ」

山岸がそつなく紹介をする横で、柿沢講師がファイルケースから写真を取り出した。

そこには、ヌードモデル中にマゾ射精してしまった猛の痴態が残されている。

頭や肩にかかったザーメンや、射精してしまったことに恥じる顔も、淫猥美として克明に残されている。

「どうですか、この淫猥美。」

芸術は綺麗なものとばかり考える者が多いですが、美を語るうえで醜を考えぬわけにはいかないように、健全美を語るのならば、淫猥美もまた、必然。

そして、高坂先生は健全美と淫猥美を兼ね備えた稀有なお人。

まさに、生きる奇跡！

この尊さはやはり、高坂先生ご自身にも知っていただかなければと思った次第です」

柿沢講師が熱弁するように、射精を恥じる猛の姿には、剣道によって鍛え上げられた健全美とマゾ射精を恥じる淫猥美の対立と緊張により、見る者の目を奪う独特の力が備わっていた。

「これ、欲しい！」

山岸が叫ぶ。

「あ、俺も欲しいです。

焼き増し料金を払えばいいですか？」

「俺にも払わせてください！」

集まってきた剣道部員たちも、次々に柿沢講師に強請り始める。

猛は、剣道部員たちに迫られる柿沢講師への迷惑を考えて叫んだ。

「お前たち、落ち着きなさい。

そんな風に群がったら、柿沢講師に迷惑だろう！」

猛の一喝で、冷静さを取り戻した剣道部員たちが次々に「すいませんでした」と謝罪をしながら柿沢講師から離れていく。

「ははははは、高坂先生は人気者でいらっしゃる。

高坂先生の魅力と誠実さを思えば、当然のことではあります。

そうですね、お手数ですが高坂先生、希望者の人数を集計していただけますか？

私はそろそろ会議に向かわなければなりませんので」

そう告げると、柿沢講師はふらっと去っていく。

会議の時間が、と言われたら猛も、剣道部員たちも引き留めるわけにはいかない。

柿沢講師の背中を見つめながら、今更ながらに猛は気がついた。

俺がヌードモデルでマゾ射精をした写真の焼き増し希望枚数を、俺が集計するのか？

気がついてしまった猛は、その事実が示す居た堪れなさで溜息をついてしまう。

だが、猛の周囲には、山岸など、期待に目を輝かせる剣道部員たちがいる。

彼らに落ち度がない以上、猛は拒むことなどできない。

たとえ、己のマゾ射精の証拠である写真であろうとも、猛は、剣道部員たちの期待を跳ねのけることはできない。

マゾ射精に至ったのは猛の不徳の致すところであり、柿沢講師にも、剣道部員たちにも非はないためだ。

それに……

猛は浅ましい己のマゾ心の疼きを感じた。

学生たちが、猛のマゾ射精写真を何に使うのか、と想像するだけで猛は浅ましい気分になる。

オナニーのオカズにするのか、あるいは、猛を辱める口実として使われるのか。

猛は大きく深呼吸をし、浅ましいマゾ欲求を振り払う。

続いて猛は、剣道部員たちを見回す。

柿沢講師に写真の焼き増しをせがんでいた剣道部員たちの向こうから、残りの剣道部員たちがやってくるのが見えた。

「写真の件については、今日の自主練が終わったあとで改めて話そう」

猛は、剣道部員全員に購入するかどうかを判断する機会を与えられるよう、そう告げた。

第 05 話 高坂猛のボディアート 01「大人の男ペイント」

「あああ！ イくううううううう！」

チャリティーバザーのブース内に用意されたディスプレイの中で、猛がパチンポからザーメンをぶっ放す様子が再生された。

手コキを始めてから 1 分もしないうちのクソザコ射精だ。

「ご覧の……パチンポの挙動は正常です。

どうしようもないクソザコですので、パチンポへの装飾の際は、ザーメンにご注意ください」

ディスプレイの中の猛に合わせるように、猛はブース内のお客に向かって猛のパチンポについての注意を終えた。

猛は、己のパチンポが最低最悪の劣悪品であることを己の口で説明することに強い恥辱を感じた。

猛自身、己の男性器と己の男性性が結びついていると感じているためだ。

けれど、この説明はお客のために必要なことなのだ。

ここは、チャリティーバザーの一角にある佐渡間高校剣道部が使用しているブースだ。

猛はブース内に、全裸で立っている。

全裸である理由は、これから猛は己の身体をキャンバスとして提供し、お客にボディアートを体験してもらうためだ。

猛の色白で筋肉質の裸体は、どんな色を乗せても映えそうである。

そして逞しい全裸の男を、アートという名目で弄り回せるということは、お客のサディズムを刺激するに違いない。

覚悟を決めていたつもりの猛であったが、最初のお客の顔を見て、羞恥と居た堪れなさでマゾスイッチが入りそうになっていた。

最初のお客は、猛が過去にヌードモデルを務めた忠相高校の学生であり、ウケ狙いで山羊尻尾のアナルビーズを造ってきた本宮たちだったのだ。

佐渡間高校剣道部の部員や、泰輔にも散々なじられたことであるが、普通の男子学生がヌードモデルのケツに入れるためのアナルビーズの自作などするはずがない。

勝手に勘違いをし、勝手にケツに挿入をし、勝手にケツイキをしてしまった恥ずべき過去を目撃者を目の当たりにして平静でいられるほど、猛の神経は太くなかったのだ。

「佐渡間高校っていうからもしかしてって思ったんですけど、高坂先生だったんですね！」

ていうか、早漏だったんですねー。

早漏だとケツでイくのも早くなるんですか？」

猛からの注意事項を聞き終えた本宮が、興味とサディズムが半々という様子で猛に問いかけてくる。

今回のブース内監視担当である遠野の目が剣呑な形に細められたのを見て、猛は、遠野に

接客中だということを思い出させるために、大きな咳払いをした。

遠野がハッとした様子になったのを横目に確認をしてから、猛は本宮を諭すことにした。

「顔見知りの君たちが来てくれたことは嬉しいが、今の質問はセクハラにあたる。

褒められたことではないぞ」

猛の注意に本宮が「すいませんっす」と頭を下げた。

「で、何をしようか？」

「佐渡間高校だからもしかして一ぐらいで入ったもんな、俺ら」

本宮の連れの男子学生たちは顔を見合わせて相談している。

おいおい、と猛は心の中でぼやいた。

このボディアート体験コーナーは、1プレイの単価を高くしている。

ボディペイント用塗料の購入や、装飾品のレンタルの費用が嵩んだこと、アートという性質上、回転数を上げることは難しいことから、1プレイの単価は本当に高い。

猛自身、己が高校在学の時の手持ちのお金で支払う気になれるか、と問われたら、首を振るだろう。

割り勘だとしても、その程度のお金を払っておいて、「何をしようか？」というのは流石に、他人事ながら「それでいいのか？」と思ってしまう。

とはいえ、今回の猛は身体をキャンバスとして提供するだけであり、お客である本宮たちが自発的にお金を支払ったのだから、1プレイの内容について口を出すのはサービスの提供者としては如何なものだろう、と思う。

加えて、事前のマニュアルとトラブルシューティング作成のための会議においても、後先考えずに利用するお客についての想定をしていなかった。

単価が高いことから、そういう冷やかしのお客は来ないだろう、と猛も、泰輔も剣道部員たちも考えなかったのだ。

遠野も、「どうしたらいいんだろう？」という顔をしている。

本宮たちの背後にあるブースの入り口から平岡が顔を覗かせ、ホワイトボードを掲げた。「状況把握。

時間厳守で行きます」

平岡が掲げたホワイトボードにはそう書かれている。

時間厳守ということは、1プレイ60分を守ることだ。

「本宮くん、制限時間の60分以内の完成を目指した方がいい」

猛は、本宮たちに制限時間についての注意をした。

「あ、そっか。

時間制限あるじゃん」

「今、何分過ぎてる？」

「ええと、5分ぐらい」

「じゃあ、あと10分で決めて、45分で作業入ろう」

本宮がスマートフォンを操作し、アラームをセットする。

そして本宮たちが車座になり、小声で相談を始める。

誰かの提案に対し、作業時間の想定を素早く返す本宮たちの様子ならば、大丈夫だろう。

猛はその様子を見て、本宮たちの時間が無駄にならないだろう、と思った。

本宮は、ウケを狙うために高い技術を使うという困った性格だが、高い技術を備えている以上、作業にかかる時間などの想定もできる方だろう。

ブース内に入ってから相談を始めるというのは、猛たちにとって想定外のことである。

けれど、本宮たちのテキパキとした様子ならば、彼らの時間が無駄になることはないだろう。

「決定！

高坂先生を大人の男にしよう！」

10 分後のアラームが鳴るかならないかというタイミングで、本宮が立ち上がり、叫んだ。

「大人の男」と言われても、猛には何のことだか分からなかった。

年齢からすれば猛は大人であるし、最低最悪の劣悪品であるパチンポをぶら下げているのだから、性別は男である。

本宮たちが何をもって「大人の男」とするのか、猛には皆目見当もつかない。

本宮たちはブース内に用意されているボディペイント用のペンを取ってくる。

色はすべて黒だ。

「じゃあ、俺は髭からやるわ」

「俺らは下から順番にやってく」

本宮たちが謎の打ち合わせを済ませると、ボディペイント用のペンを猛に向けてきた。

キュキュッキュキュ……

本宮が猛の口周りに線を何度も何度も引いている。

髭を描かれているのだ、と猛は分かった。

他の学生たちは猛の足の甲にペンを滑らせている。

猛は、本宮たちの意図を察した。

本宮たちのいう大人の男とは、体毛がボウボウに生えた雄臭い男のことなのだ。

確かに、体毛がボウボウに生えた雄臭さを大人の男とするのなら、猛はそれからほど遠い。

色白の肌には産毛のように細い体毛しか生えていないため、毛が生えているように見えないし、髭も伸びない方だ。

髭を描き終えた本宮が「胸毛！」と告げ、猛の乳首周りにグルグルとペンを滑らせ始めた。

「っ……」

猛は乳首でもイけるので、乳首周りへの刺激には敏感な方である。

乳首そのものを摘ままれていないとはいえ、乳首の周りにペンを滑らされると期待してしまう。

本宮のペンの動きが乳首周りから胸板全体に広がる。

ペン先が乳首から離れたことに猛はホッとした。

ボディアートのキャンバスとして己の身体を差し出すことを受け入れたとはいえ、顔見知りの学生たちに乳首でも感じるところを見られてしまうのは、恥ずかしかったのだ。

ギュン、と猛の下腹部が疼いた。

もしも、乳首でも感じるところを見られたら、という想像だけで猛のマゾヒズムが疼いて

しまったのだ。

猛は大きく息を吐き、浅ましい淫欲から意識を紛らわせようとする。

本宮たちは、猛の浅ましい淫らさに気がつかない様子で、一心不乱に猛の裸体に体毛を描き込んでいる。

猛の裸体は、色白の肌と鍛え抜かれた筋肉により、西洋彫刻のような雰囲気을備えている。

ただ、全裸で立っているだけでもアートとして成立しうる見事な裸体に、本宮たちはペンを走らせ、体毛という俗っぽさを足している。

本宮たちは、体毛を描き込むという単純作業であるにもかかわらず、笑みを浮かべ、興奮した様子で楽しんでいる。

降り積もった新雪に足跡をつける子どものように、本宮たちは猛の裸体に体毛を描き込むことに夢中になっている。

腕に、脛に、胸に、太ももに、腹に、体毛が描き込まれていく。

「よっし、ちょっとバランスを見てみよう」

本宮の号令と共に、学生たちが猛から離れた。

猛の裸体は、西洋彫刻のような雰囲気から、滑稽な様子へと変わっていた。

リアリティのある描き方ではなく、「大人の男」を示す記号として描かれた体毛が、下腹部以外の全てに描きこまれているため、大人ぶっている子どものようなアンバランスさが現れているのだ。

「チン毛はどのぐらいにしようか？」

俺はへそからつながるモジャモジャがいいな」

本宮が、猛の無毛の下腹部を指さして提案する。

「えー、高坂先生には整ったチン毛の方がいいじゃん。」

エロ動画みたいにさ、見たことないけど」

「見たことないのかよ」

他の学生たちがじゃれ合いながら、猛に描き込むチン毛について話し合っている。

チン毛を剃り落とす習慣が長い猛にとって、己のチン毛はない方が自然なことと思えている。

だから本宮たちが、猛に描き込むチン毛について熱く語っている様子は、微笑ましい反面、落ち着かない気分になる。

「あ！」

そんな中、本宮が大きな声を上げたので、猛は驚いた。

「何だよ、本宮」

「急に大声を出すなよ、本宮」

他の学生たちが大声を上げた本宮に注意をする。

「忘れてた！ 大人の男なら亀頭を黒くしておかないと！」

本宮が猛のパチンポを指さして大声で言った。

猛のパチンポの亀頭は綺麗なピンク色をしたずる剥けである。

竿役として穴に突っ込むこともなく、手コキに耽ることもない猛の亀頭は淫水焼けや、手コキ擦過による色素沈着もないため、童貞ピンクのままなのだ。

確かに、性経験を持って「大人の男」とするのならば、猛の童貞ピンク亀頭は大人の男と

は真逆だろう。

本宮の指摘を聞いた猛は、雄肉がみっしりと詰まったケツ肉をぎゅっと締める。

猛のクソザコ亀頭は刺激にとても弱い。

亀頭を黒く塗られたりしたら、間違いなく、その過程で勃起し、射精してしまう。

体育教師としての猛と、恥ずかしい命令に屈服させられたい猛が心の中でせめぎ合う。

そのせめぎ合いがに決着がつくより先に、本宮が筆と真っ黒な塗料が入った瓶を持ってきた。

「へへへ、大人のずる剥け黒チンポにしてあげますよ」

本宮がそう告げると、猛のクソザコ亀頭に筆をべとっとつけた。

ゾゾゾゾゾと背筋を快感が駆け上がる。

「あっ」

猛は大きく肩を震わせた。

「高坂先生、エッチな声を出すじゃん」

本宮の言葉に、他の学生がニヤニヤと笑っている。

猛は己のクソザコ亀頭を恥じ、ケツをぎゅっと締める。

それと同時に、本宮たちの嘲笑によって猛の中でマゾスイッチが入った。

こんな恥ずかしいパチンポを、「大人の男」として装飾されていることに、猛はゾクゾクしてしまう。

猛の股間でパチンポがムクムクと勃起し始めた。

「うわ、勃起するの早！」

本宮が背筋を仰け反らせる。

「高坂先生のパチンポ、拙速にもほどがあるよな」

「これで正常な挙動なんだろ、かわいいよな」

他の学生たちもあっという間にフル勃起する猛のパチンポに嘲笑を向けている。

フル勃起した猛のパチンポは、見かけだけなら立派なものである。

堂々と屹立する上反りの陰茎は、太く、長く、逞しく、力強さを示している。

勃起に伴い収縮した玉袋によってSサイズの鶏卵程度の大きさの金玉も目立っているが、猛の陰茎の大きさと釣り合い、見苦しさを感じさせないフル勃起となっている。

猛のクソザコ亀頭は、本宮の手によって中途半端に黒い塗料が塗られている。

猛の鈴口から、猛のマゾスイッチによって我慢汁が流れ始める。

猛の我慢汁は量が多い。

高い勃起角度からぬとぬと我慢汁が糸となって床まで伸びるほどに、猛の我慢汁は潤沢なのだ。

ぬとぬとと溢れ出る我慢汁が、亀頭についた黒い塗料を絡めとりながら黒い糸となって床に伸び始める。

「あ、折角塗ったのに！」

本宮がそう叫ぶと、猛の側面に回り横から猛のクソザコ亀頭に筆を走らせ始める。

ゾゾゾゾゾゾゾゾ……ゾゾゾゾゾゾゾゾ……

「イイイイイイくうあああああううあああああおおおおおおおおお」
「うひひひひひああうううあああおおおおおおおおおん！」
「むりひひひひひああいあうあああああひあああううううううう！」

猛の無様な喘ぎ声が響くたび、猛のザーメンがぶっ放され、猛のザーメンの臭いでブースが満たされていった。

「はい、時間ですよ」

遠野の呼びかけと同時に、ピピピピピと大きめのアラームが響いた。

「ううう……うひい……」

絶え間なく繰り返される筆責めによって途切れることのない射精地獄に落とされた猛は、かすれた声で喘いでいた。

猛のパチンポは、浅ましく勃起し続けている。

チンポセックスの役に立たない不能にして無能でありながら、射精量と勃起力だけは人並み外れた愚鈍さを、馬鹿馬鹿しく示している。

そのクソザコ亀頭は猛がぶっ放し続けたザーメンと、黒の塗料が混在する中に、地肌である童貞ピンクが覗く淫猥な様子を示している。

猛の全身に塗られた塗料は、猛が喘ぎながら流した大量の汗に負け、僅かににじんでいる。

「では最後に記念撮影をします。」

本宮さんたちは受付で使用前・使用后オプションをご購入いただいたため、後日、郵送で観音開きのパネルをお届けします」

「へ？」

遠野の説明に猛は驚いた。

オプションの存在自体は猛も知っているし、受け入れている。

観音開きのパネルの左側に、ボディアート前の猛のヌード写真、そして右側にボディアート完成後の猛の写真を収めたものを販売する追加オプションなのだ。

ポラロイド写真よりも見栄えが良く、また、料金の上乗せもできるということで採用されたのだが、当然ながら、高い。

そんな大金を、本宮たちが支払ったことに驚いたのだ。

「では、ポーズの指定をお願いします」

遠野の伺いに、本宮たちが顔を見合わせ、声をそろえて答えた。

「大人の大的ポーズで！」

シャッター音が何回か響き、大人の男アートとなった猛の姿が撮影された。

口周りに髭を描かれ、身体中に体毛を描かれた猛が腕を左右に広げ、両足を大きく開いて「大」を示している様子は、罰ゲームに負けたようでもある。

けれど、猛のパチンポが勃起し、連続射精の痕跡であるザーメンも絡みついているため、猛がこの辱めを悦んでいることは如実に示されている。

加えて、本宮たちは猛のチン毛を描き忘れていた。

本宮たちは、猛のチン毛について相談している最中に、クソザコ亀頭や乳首、ピンクアナルを筆で責め始めたからだ。

だから、体毛を描かれた猛の裸体の中で地肌の白さが目立つ下腹部に視線が誘導され、猛のパチンポがフル勃起していることが、見る者に強くアピールされる。

高坂猛が見事な健全美と筋肉美を備えているからこそ、辱めの無様さと被虐の醜快が際立っているのだ。

奥付

サンプル版 マゾマン高坂猛シリーズ 02 『マゾマン高坂猛の淫モラルアート』

初出：2026 年 02 月 11 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。